

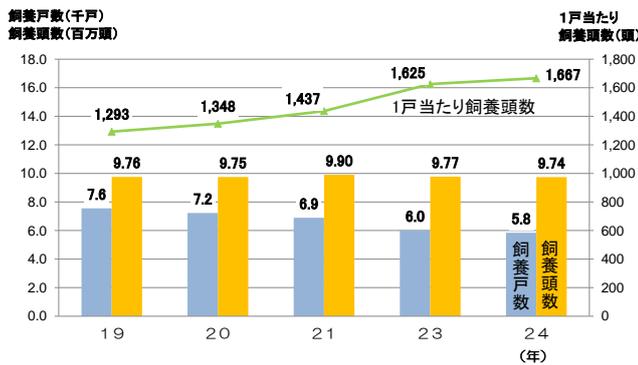
豚肉



◆飼養動向

24年2月現在の1戸当たり飼養頭数、2.6%増加

図1 豚の飼養戸数および飼養頭数



資料：農林水産省「畜産統計」

注1：各年2月1日現在

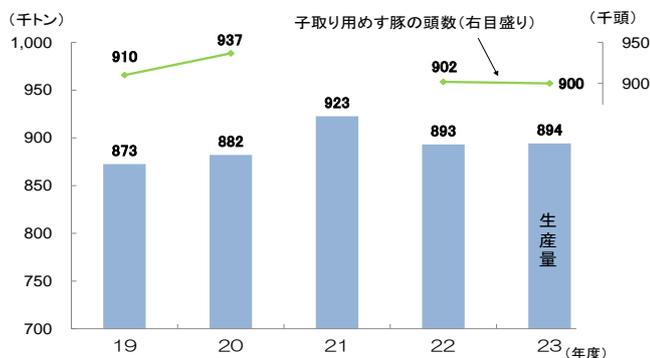
2：22年は世界農林業センサスの調査年のためデータがない

飼養戸数は、一貫して減少傾向となっており、24年は5,800戸(▲2.8%)となった。飼養頭数は飼養戸数に比べ、減少幅は小さいものの、21年以降減少しており、24年は973万5000頭(▲0.3%)となった。この結果、1戸当たり飼養頭数は1,667頭(2.6%)と、わずかに増加しており、規模拡大傾向が続いている(図1)。

◆生産

23年度の生産量、前年並み

図2 豚肉生産量と子取り用めす豚の頭数



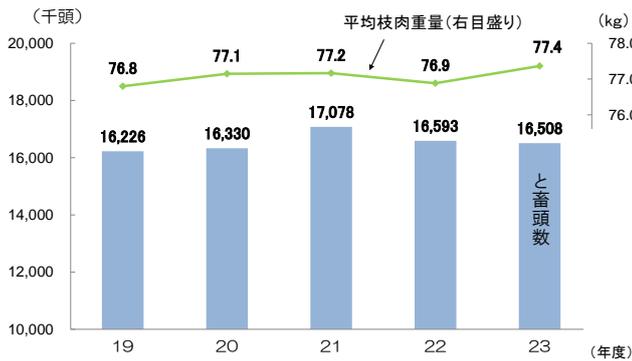
資料：農林水産省「畜産統計」、「食肉流通統計」

注1：生産量は、部分肉ベース

2：子取り用めす豚の頭数は、各年度2月1日現在。21年度(22年2月1日現在)は世界農林業センサスの調査年のためデータがない。

21年度の豚肉生産量は、衛生対策の効果による疾病率の低下などから92万3000トン(4.6%)と増加した。22年度は宮崎県における口蹄疫の発生や記録的猛暑の影響による出荷頭数の減少から、89万3000トン(▲3.2%)と3年ぶりに減少した。23年度は、前半は、前年の猛暑による受胎率の低下から、と畜頭数が減少傾向で推移したものの、8月以降、受胎率低下の影響が解消され、と畜頭数が増加傾向となった結果、前年並みの89万4000トンとなった(図2)。

図3 豚のと畜頭数と平均枝肉重量



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注：平均枝肉重量は全国平均

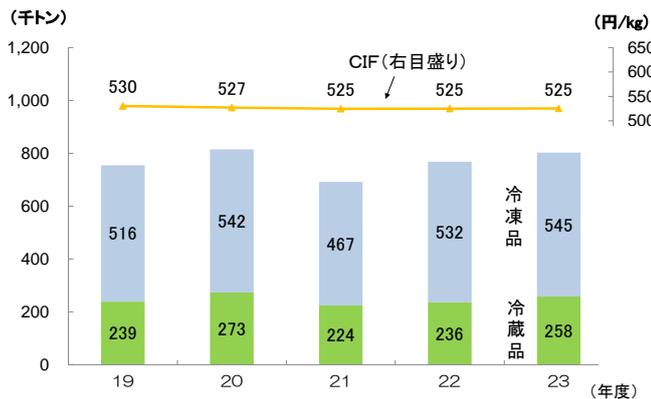
23年度の豚のと畜頭数は、前半は、前年の猛暑による受胎率の低下から、減少傾向で推移したものの、8月以降、その影響が解消され、増加傾向で推移した結果、年度全体では1650万8000頭(▲0.5%)と減少した。

また、平均枝肉重量は、19年度以降2年連続で増加したものの、22年度は、記録的猛暑の影響により、減少した。23年度は、1頭当たり77.4キログラム(0.6%)と回復し、2年ぶりに増加した(図3)。

◆輸入

23年度の豚肉輸入量、4.5%増加

図4 豚肉の冷蔵品、冷凍品別輸入量とCIF価格

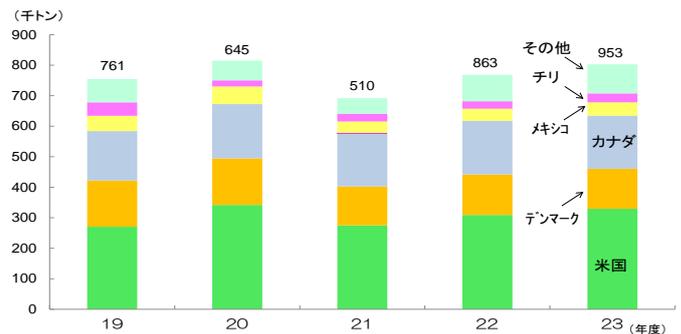


資料：財務省「貿易統計」

注：部分肉ベース

21年度の豚肉の輸入量は、年度前半の在庫が高水準であったため、冷凍品を中心に、2年ぶりに減少した。22年度は国内生産量が減少したことなどから増加した。23年度は、東日本大震災後の豚肉加工品需要の高まりなどから80万3000トン(4.5%)と2年連続で増加した(図4)。

図5 豚肉の国別輸入量



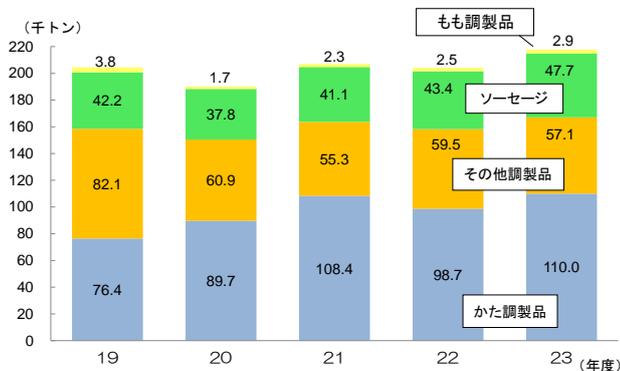
資料：財務省「貿易統計」

注：部分肉ベース

23年度の国別輸入量は、米国産は国産豚肉に比べ安価であるため、テーブルミート向けの冷蔵品を中心に増加したことから33万トン(6.6%)となった。一方、カナダ産、デンマーク産は、それぞれ17万4000トン(▲0.8%)、13万1000トン(▲1.2%)と、わずかに減少した。また、メキシコ産とチリ産は、数量は少ないながらも安価な加工原料の供給源として、それぞれ4万3000トン(9.2%)、チリ2万9000トン(20.2%)と増加した。(図5)。

豚肉調製品・ソーセージ

図6 豚肉調製品およびソーセージの輸入量



資料：財務省「貿易統計」

- 注：もも調製品 : 1602-41-090
- かた調製品 : 1602-42-090
- その他調製品 : 1602-49-290
- ソーセージ : 1601-00-000

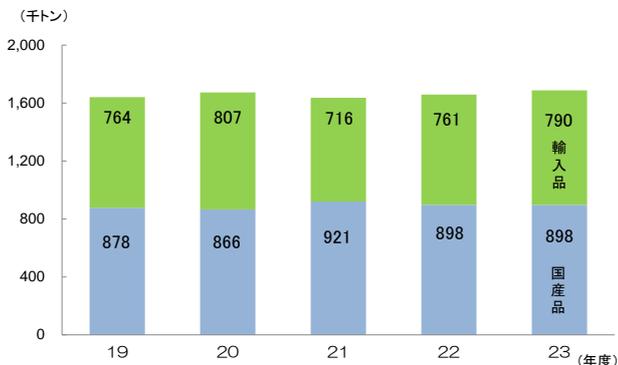
豚肉調製品(豚の肉またはくず肉のみから成るものを除く。)やソーセージは、19年度後半に起きた中国産冷凍ギョーザ事件を契機に、20年度は中国産豚肉調製品を中心に減少した。21年度は、安価な輸入豚肉調製品への需要が高まり、増加した。22年度はソーセージは増加したものの、調製品は、かた調製品がかなりの程度減少したため、全体では減少した。23年度は東日本大震災後の豚肉加工品需要の高まりなどもあり、豚肉調製品・ソーセージともに増加した(図6)。

◆消費

23年度の推定出回り量は1.8%増加、家計消費は2.0%増加

推定出回り量

図7 豚肉の推定出回り量



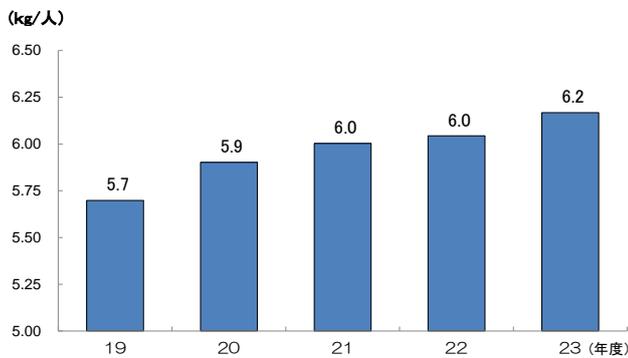
資料：農林水産省「食肉流通統計」,財務省「貿易統計」,農畜産業振興機構調べ

注：部分肉ベース

近年の豚肉の推定出回り量は、おおむね微増傾向で推移している。21年度は生産量は増加したものの、輸入量の減少から、3年ぶりに減少した。22年度は生産量は減少したものの、輸入量の増加により、2年ぶりに増加した。23年度は国産品は89万8000トンと前年並みであった一方、輸入品は、2年連続で増加し、79万トン(3.8%)となり、全体では168万8000トン(1.8%)と増加した(図7)。

家計消費

図8 豚肉の家計消費量(1人当たり)



資料：総務省「家計調査報告」

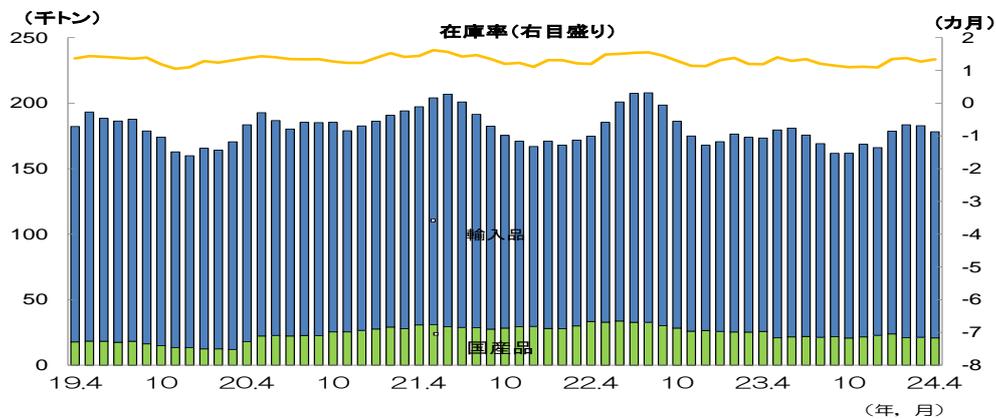
近年の豚肉の家計消費量は、増加傾向で推移している。22年度は消費者の経済性志向が根強い中、牛肉に比べて値ごろ感があることや、鳥インフルエンザの発生に伴う鶏肉からの代替需要などから堅調に推移し、1人当たり6.0キログラム(0.7%)とわずかに増加した。

23年度は、放射性セシウム検出により消費が減少した牛肉の代替需要などから、同6.2キログラム(2.0%)とわずかに増加した(図8)。

◆在庫

23年度の推定期末在庫量、5.1%増加

図9 豚肉推定期末在庫量と在庫率



資料：農畜産業振興機構調べ

注1：在庫率＝在庫量／推定出回り量

2：部分肉ベース

豚肉の推定期末在庫量は、高水準であった20年度から取り崩しが進み、21年度末の在庫量は17万2000トン(▲11.5%)と減少した。22年度は、夏場にかけて輸入量が増加したため、積み増しが進んだことなどから、年度末の在庫量は17万4000トン(1.2%)とわずかに増加した。23年度は、前半は牛肉からの代替需要などから取り崩しが進んだ

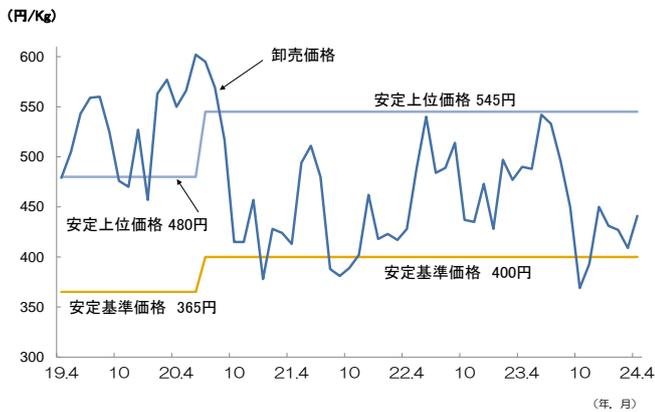
ものの、後半は輸入量の増加から積み増しが進み、年度末の在庫量は18万3000トン(5.1%)とやや増加した。内訳は、国産品が2万1000トン(▲15.8%)、輸入品が16万2000トン(8.7%)となった。

なお、23年度の在庫率は、1.0～1.4カ月の間で推移し、おおむね前年同月を下回った(図9)。

◆枝肉卸売価格

23年度の枝肉卸売価格、17円安のキログラム当たり457円

図10 豚枝肉の卸売価格(東京・省令)



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注1：消費税を含む。

2：省令は、極上と上の加重平均

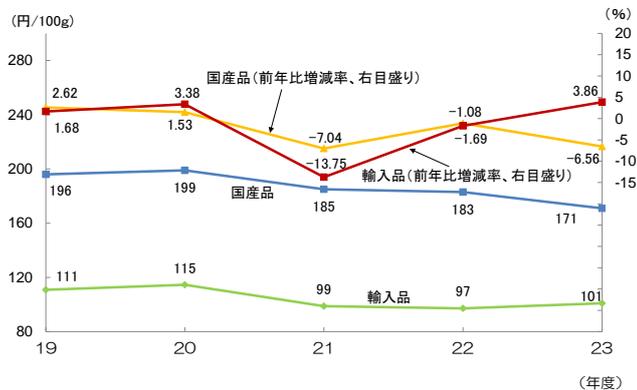
豚枝肉の卸売価格(東京・省令規格)は、20年度後半以降、軟調に推移し、21年秋には300円台後半まで値を下げた。このため、畜産業振興事業による調整保管が6年ぶりに実施された。22年度は口蹄疫の発生、夏場の記録的猛暑の影響で出荷頭数が減少したことなどから、前年度を上回る価格で推移した。

23年度前半は、22年夏場の猛暑による受胎率の低下から、出荷頭数が減少傾向となったことに加え、牛肉からの代替需要もあり、卸売価格は前年を上回って推移した。しかし、23年度後半になると、出荷頭数、輸入量の増加から、卸売価格は前年を下回って推移し、年度平均の卸売価格はキログラム当たり457円(▲3.6%)と前年度をやや下回った(図10)。

◆小売価格

23年度の小売価格(特売価格)、国産品は値下がり、輸入品は値上がり

図11 豚肉(ロース)の小売価格(特売価格)



資料：農畜産業振興機構調べ

注：消費税を含む。

20年度以降の「ロース」の小売価格(特売価格)は、おおむね下落傾向で推移している。21年度の国産品は、枝肉卸売価格が低水準で推移したことにより下落した。22年度以降も消費者の経済性志向などから下落し、23年度は100グラム当たり171円(▲6.6%)となった。

21年度の輸入品は、国産品に連動し下落した。22年度も輸入量の増加などから下落したものの、23年度は100円を下回る低水準が続いたことから下げ止まり、同101円(3.9%)となった(図11)。